様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４１５

研究課題名（和文）日系ブラジル人の記憶と創造に関する研究

研究課題名（英文）Research on the memory and representation of Japanese-Brazilians

研究代表者
平田　惠津子（HIRATA, Etsuko）

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・教授

研究者番号：９０２９４１７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ブラジル文学において書く側としても書かれる側としても不在の存在となってきた民族的マイノリティーの日系人が「自分たち」の共通の記憶、つまり、ブラジルへ移住した日本人とその子孫が積み重ねてきた歴史的体験をどのように言語化してきたか、また、それがブラジル社会においてどのように受け入れられてきたかを調査し、ブラジルで民族的マイノリティーであることと自己表現の関係性について考察を行った。ポルトガル語を母語とし、ブラジルで一定の評価を得ている日系人作家を主な研究対象とした。

研究成果の概要（英文）：Japanese Brazilians, being as ethnic minorities in Brazil, have been long “absent” in Brazilian literature both as writers and as characters. However, there exist some significant works, written by Japanese Brazilians, that focused on the memory of their shared past, i.e., the history of Japanese immigration to Brazil. We tried to examine the representation of Japanese immigrants and their descents in these works and find out the relation between being ethnic minorities in Brazil and their writing literary works.

研究分野：ブラジル文学

キーワード：ブラジル文学　日系ブラジル人　アイデンティティー　マイノリティー

１．研究開始当初の背景

ブラジルはさまざまな文化的背景を持つ移民を受け入れてきた多民族国家であるが、その多様性から想像されるほど、民族の違いやそれが原因で生じる問題に対して関心が高くない。アカデミズムにおいて、ブラジル文化が多様な人種・民族の混淆の産物であるという見方は共有されているものの、ブラジル文化や民族を定義しようとする際、議論の中心になるのは、ブラジルの基層文化をつくったとされる三つの人種、つまり、先住民族インディオとポルトガル人入植者、そして奴隷としてアフリカから連れてこられた黒人に限られる。一方、19 世紀半ばからブラジルへ移住し、国の近代化に大きく貢献したポルトガル人以外のヨーロッパ人やユダヤ人、ムスリム、アジア人に対する関心はおしなべて低い。

20 世紀初頭、ブラジルへの集団入植を開始した日本移民については、歴史学や社会学の分野において、一定の質と量を兼ね備えた研究が蓄積されてきているが、文学の分野において、日本移民とその子孫の問題を掘り下げて創作された作品はほぼ皆無と言っても過言ではない。初期の日本移民が異国での自分（たち）の経験や心情について書き綴った作品は数多く残されているが、それらは同人誌的性格が強かったうえ、日本語で書かれていたため、閉ざされた日系人コミュニティーの壁を越え、広くブラジル社会で受容されることはなかった。このような状況は、ブラジルと同様、移民によって成り立つ多民族国家のアメリカ合衆国やカナダで日系文学作品が広く読まれ、大学などの研究機関で研究対象となっている状況とは大きな隔たりがある。

２．研究の目的

本研究は、ブラジル文学において、書く側としても書かれる側としても不在の存在となってきた日系ブラジル人が、「自分たち」、つまり、ブラジルへ移住した日本人とその子孫が積み重ねてきた共通の歴史的記憶をどのように言語化してきたのか、また、それがブラジル社会においてどのように受け入れられてきたか調査し、ブラジルで民族的マイノリティーであることと自己表現の関係性について考察することを目的とする。

主な研究対象は、ポルトガル語を母語とし、ブラジルで一定の評価を得ている日系人作家とその作品である。彼らの作品の特徴や共通点を明らかにすることで、「日系アメリカ文学」に比肩するような「日系ブラジル文学」の確立の可能性について考えたい。

３．研究の方法

上記の目的を果たすための主な研究方法は、研究材料となる資料の収集と、それらの整理・分析である。

資料収集については、まず、ブラジルの日本移民とその子孫について、日系ブラジル人がポルトガル語で書いた文学作品をあらたに「発掘」すること、さらに、本研究の関連資料・情報を入手することを試みた。日本での入手が難しいそれらの資料を得るためには、現地へ行くことが必須であったため、2016 年 9 月、ブラジルへ渡航し、約 2 週間、現地に滞在し、調査・収集活動を行った。ブラジル滞在中はサンパウロ市を活動の拠点とし、そこにあるブラジル日本移民資料館、国際交流基金サンパウロ日本文化センター、サンパウロ大学図書館などで調査活動を行った。その結果、あらたな日系人作家・作品の「発掘」には至らなかったが、貴重な関連資料・情報が得られた。とりわけ、本研究においてもっとも重要な作家として着目していたふたりの日系人作家にインタビューを行うことができたのは大きな成果であった。具体的には、サンパウロ市で *Sonhos bloqueados*(1991)の作家ラウラ・ホンダ・ハセガワ氏に、また、パラナ州ロンドリーナ市で *Nihonjin*（2011）の作家オスカル・フサト・ナカザト氏に会って、彼らの作品や創作スタイルについて、また、ブラジルで日系人であることなどについて語ってもらった。

日本においては、現地で新たに入手した資料を加えた関連資料を整理・分析し、それに照らしながら、一次資料である文学作品の精読を行った。

４．研究成果

本研究の成果は、論文と学会での口頭発表でまとめたので、それぞれの主旨を以下に詳述する。

（１）2016 年に執筆した論文「ブラジル文学における日本移民の表象」において、20 世紀初頭以降、ブラジルへ移り住んだ日本人とその子孫がブラジル文学作品のなかでどのように表象されてきたか、次の 3 つの観点から検討した。

①文学作品のテーマとしての日本移民

日本移民がブラジルで果たした役割や貢献については、彼らの受け入れ国となったブラジル一般に広く認知され、アカデミズムにおいても歴史学や社会学の分野を中心に、一定の研究の蓄積がなされてきている。しかし、ブラジル文学に目を向けると、困難と挫折に満ちた日本移民のドラマを物語った作品はほとんど存在しない。あえて挙げるとすれば、1920 年代、サンパウロを中心に興ったモデルニズモ文学を代表する作家たちの作品に数は少ないながらも日本移民が登場する。しかし、それらの登場人物はすべて、当時、急速な近代化によって大きく変わろうとしていたブラジル社会と自国民の姿を描き出すため、対照的に描かれた二次的な存在で、ステレオタイプで平面的なキャラクター造形の産物でしかなかった。マリオ・デ・アンドラーデ（1893-1945）の小説 *Amar, verbo intransitivo*（1927)に登場するタナカがその典型的な例である。

②戦後生まれの 3 人の女性作家たち

ここでは、小説家のラウラ・ホンダ・ハセガワ（1947- ）と、ふたりの映像作家、チズカ・ヤマザキ（1949- ）とオルガ・トシコ・フテンマ（1951- ）に着目して、それぞれの作品の特徴と共通点について考察した。この 3 人のなかで、最初に日系ブラジル人をテーマに作品を制作したのはフテンマで、1970 年代から 1980 年代にかけて、サンパウロ市の日系人居住区で暮らす人々の日常風景を映像と詩的ナレーションで綴った短篇ドキュメンタリー作品と、日本映画フィルムを携えてサンパウロ州内陸部の日本人入植地を巡回していた「シネマ屋さん」を扱った短篇劇映画を発表し、一定の評価を得た。次に、ヤマザキは、現在、ブラジルでよく知られている映像作家であるが、彼女を世に知らしめたのが、1980 年、監督デビュー作となった長篇劇映画 *Gaijin - os caminhos da liberdade*（ガイジン－自由への道）であった。この作品は、第 1 回移民船笠戸丸に乗ってブラジルへやって来たさまざまな日本移民がたどった運命を描き出したもので、興行的成功を収めると同時に、ブラジル国内外で高い評価を得た。かつて日系社会の外側で語られることのなかった初期日本移民の苦難と屈辱の物語をブラジル映画史に刻み込んだ点でこの作品が果たした役割は大きい。文学の分野では、1991 年に出版されたハセガワの長篇小説 *Sonhos bloqueados*（断たれた夢）が特筆に値する。この小説には、日系 2 世の主婦キミコの回想をとおして、彼女の人生に関わったさまざまな日系一世や 2 世の女性たちの生き方が描かれている。

ここで挙げた同世代の 3 人の女性作家たちの作品の底流に、男性中心の価値観から語られてきた日本移民の物語を、女性の視点から語りなおそうとする思いが共通して存在することを指摘した。

③新しい世代の日系人作家たち

2012 年、ブラジル出版界において最も権威ある賞として知られるジャブチ賞の小説部門で、日系 3 世オスカル・フサト・ナカザト（1963-）の *Nihonjin* が受賞した。ブラジル国内の各メディアが、この受賞を日系人初の快挙として大きく報じた。この作品は、高校教師の職を捨て、デカセギとして日本へ発つ日を目前に控えた日系 3 世のノボルが語り手となって、1920 年代にブラジルへ移住した祖父ヒデオ・イナバタの半生についてふり返るという話である。ブラジルへ向かう船のなかでヒデオが同船者たちと語り合う夢や不安、ブラジルに到着して直面する厳しい現実、日本への郷愁、第二次世界大戦中、敵性国人としてブラジルで暮らす不安に満ちた日々、子どもたちとの世代間衝突について語られているが、これらは初期の日本移民に共通の記憶として刻まれた歴史的体験である。ブラジルの文学批評家たちは *Nihonjin* が、日本移民という「新しい」テーマをブラジル文学にもたらしたことを受賞の理由として挙げ、「この小説は、何よりもまず、我々の文学にほとんど不在のテーマである日本移民の歴史を雄弁に再構築したものである。…ナカザトの小説は、民族的出自に関わりなく、あらゆる読者を感動させ、登場人物や描き出された苦しみに強い共感を覚えさせる」と称賛したが、それを裏返せば、かつてブラジル文学において日本移民の物語がほとんど語られてこなかったことを意味する。また、これらのコメントが、約 30 年前に上映されたチズカ・ヤマザキの *Gaijin* に与えられた評価を繰り返すものであることを知れば、いかに日本移民の存在が文学や映画の分野で不可視の存在になってきたか理解できる。しかしながら、ナカザトの *Nihonjin* がジャブチ賞を受賞したことの反響は大きく、それまであまり注目されてこなかったほかの日系人作家の作品にも光が当てられつつあることを確認した。

最後に児童文学の分野で活発な創作活動を行っている日系 3 世のルシア・ヒラツカ（1960- ）をとりあげた。ヒラツカは、日本留学中、日本の絵本について学んだ経験を生かし、宮沢賢治の作品や、浦島太郎などの日本の昔話を数多くポルトガル語に翻訳しているほか、ポルトガル語で創作童話も書いており、2008 年には、日本人のブラジル移住 100 周年を記念して *Os livros de Sayuri*（サユリの本）を出版している。これは、現時点で、日本移民をテーマにヒラツカが書いた唯一の作品であるが、2009 年度「にっけい文芸賞」（“Prêmio Literário Nikkey”）ポルトガル語部門で入賞している。その際、審査委員のひとりは、「一見、子ども向けの本のようであるが、読み進むにつれて、それがより複雑なテーマをもち、おとなも関心をもって読むことのできる本であることに気づかされる」と高く評価した。

以上のように、決してその数は多いとはいえないにせよ、評価に値する作品は存在する。既存の作品を忘却の彼方へ埋もれさせないためにも、また、あらたな作品の登場を促すためにも、これらの作品に多様な視点から解釈を行うことによって、作品の世界観を広げることが今後の課題であることを指摘した。

（2）2018 年 3 月 24 日に開催された日本ポルトガル・ブラジル学会において、「日系ブラジル文学：ラウラ・ホンダ・ハセガワの *Sonhos Bloqueados* を読む」と題して口頭発表を行った。

この発表では、「日系アメリカ文学」に比肩するような「日系ブラジル文学」が確立する可能性があるかどうかを切り口に、日系 3 世ラウラ・ホンダ・ハセガワの小説 *Sonhos Bloqueados* (1991)を検討した。

「日系ブラジル人初の本格的な小説」と評されたこの小説には、語り手の日系 2 世キミコをはじめとするさまざまな日系女性が登

場し、日本の伝統的価値観とブラジルの西洋的価値観のはざまで息苦しさを感じながら生きる彼女たちの日常が描かれている。登場人物たちが苦悩する親子間や兄弟間の問題の根底には、日本の家父長制的価値観があるとはいえ、新しい生き方を模索する若い世代の渇望や世代間ギャップが生む衝突は言語や文化の違いを超えた一定の普遍性をもつ。

最後に、本研究で取り上げた作家たちは皆、程度の差はあれ、日系社会への帰属意識が薄いことを共通点として指摘しておきたい。彼らの作品は、文化人類学者の前川隆が「強い被害者意識に包まれ」ていると厳しく評した移民１世の作品とは性質を大きく異にしている。映像作家のヤマザキとフテンマ、小説家のハセガワ、ナカザト、ヒラツカ、彼らは日系人の問題をあくまで創作のための材料として選び、客観的にとらえることによって、作品として昇華させることに成功した。今後、日系人のブラジル社会への同化はますます進み、「日本人」としての意識は希薄になっていくばかりであろう。だが、その距離感がさらなる客観性を醸成し、より普遍性を帯びた作品の創作へつながることを期待したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
平田　惠津子、「ブラジル文学における日本移民の表象」、『ブラジル研究』、査読無、１３号、２０１７、３３－４１

〔学会発表〕（計１件）
平田　惠津子、「日系ブラジル文学：ラウラ・ホンダ・ハセガワの *Sonhos bloqueados* を読む」、日本ポルトガル・ブラジル学会関西部会大会、2018 年 3 月 24 日

６．研究組織
(1)研究代表者
平田　惠津子（HIRATA, Etsuko）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：90294173